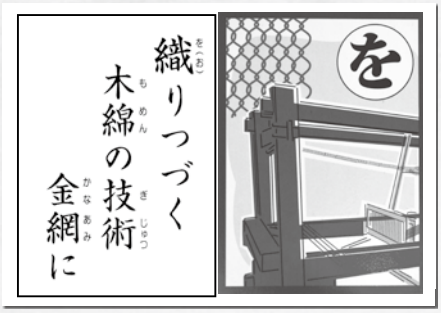
vol.222

松原の金網生産の祖、岩崎藤吉

西田 孝司（松原市文化財保護審議会）

▶岩崎藤吉墓（阿保6丁目・阿保墓地）

▶岩崎藤吉建立の両親の墓石



▲阿保の金網を紹介した「まつばらいろはかるた」（平成27年10月、松原市教育委員会発行）

阿保で河内木綿の織機を利用 世界に向かう松原の金網技術

松原には、地場産業として金網の生産がいきづいています。とくに、阿保公民館の建つ海泉池北側の町工場で金網の製造が盛んです。路地から路地へ「ガッチャン、ガッチャン」と機械の音が鳴り響いています。

江戸時代、松原市域の農村では河内木綿が栽培され、商品化していました。明治・大正時代に入っても、木綿生産を生かして織物工場がつくられていきました。しかし、やがて河内木綿の需要が減少してきたことから、近代以降、発展しつつあった金網の生産に河内木綿の織機が金網の織機に利用できることに着目して、阿保で金網生産が行われるようになったのです。

明治三十五年（一九〇二）、阿保の岩崎藤吉は、織物の技術を向上させるため、天満（大阪市）の大阪金網で技術を修得した後、阿保に戻って、明治三十九年（一九〇六）、金網業を始めたと伝えられています。藤吉の家は海泉池北堤を阿保神社へ向かう、今の阿保集会所前にありました。

藤吉は、近くの出島総次郎らと共に金網製造の普及につとめ、その技術は阿保の旧綿織業者間に広まり、織物工場が金網工場に変わっていったのでした。

藤吉は、明治七年（一八七四）生まれで、昭和三十五年（一九六〇）三月二十五日、八十八歳で生涯を閉じました。法名は釋遺功。自宅前の檀那寺であった西徳寺（真宗大谷派）が葬儀の導師をつとめました。すでに藤吉墓は、大正七年（一九一八）四月、弟子たちによって藤吉四十五歳の時、阿保墓地に建てられていました。正面に楠公の菊水紋をはめこみ「岩崎墓」とあり、左右に「大正七年四月立建」「俗名岩崎藤吉」、台石に「門弟中」とあります。墓地中央の観音像や地蔵像を祀る堂のすぐ東側です。

藤吉墓の南側には、無縁塔があり、多くの墓石が何段にもわたって並べられていますが、その一段目東南隅には、藤吉が明治三十九年（一九〇六）二月に建てた両親の「釋浄信 釋尼法海」墓も見られます。もともとは、藤吉墓の東側に並んでいました。

大正十年（一九二一）、藤吉や総次郎らから技術修得した西田虎吉は、西田虎金網製作所を興こしました。今も使われている工場は大正末期の建物で、何本もの丈夫な梁で支えられ、当時動いていた手織り機の巨大な部材も天井につられています。

昭和に入って、阿保では金網工場が増え、昭和十年（一九三五）には松原金網組合も設立されました。四〇社以上の金網工場が加盟していた時期もありました。

阿保の金網業がいっそう発展するのは、昭和九年（一九三四）七月、土木・建築用総合金網メーカーの松井金網が府内や奈良県内に散在していた工場を阿保に集約し、松原工場を建設したことです。

松井金網は明治十年（一八七七）四月、大阪で松井末治郎が創立したのですが、大正時代に同店で仕事をしていた縁戚の馬場傳次郎が、昭和二年（一九二七）四月、阿保に来て金網生産を始めていたのです。その七年後に、傳次郎の自宅兼工場周辺の土地を松井金網が買い取って新工場を建て、のち本社も阿保に移したほどです。

今の阿保六丁目、海泉池北堤から阿保墓地に至る道路両側に工場が広がっていました。傳次郎は松原工場の責任者だけでなく、全国組織の日本金網団体連合会のトップになるなど、金網業界の発展にも尽くしました。藤吉の妻サヨが自宅東側の松井金網で働いていたこともあり、藤吉の葬儀を松井金網が執り行っています。サヨもその数年後に亡くなり、藤吉墓に眠っています。

松原の金網の祖といえる藤吉の技術を発展させ、今では世界に羽ばたくスーパーメッシュのハイテク製品も松原でつくられているのです。